九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

大学生における性に対するネガティブな態度に関する研究 : 自己・他者への意識との関係から

浜田, 恵
九州大学大学院人間環境学府

北山, 修
九州大学大学院人間環境学研究院

https://doi.org/10.15017/8027

出版情報：九州大学心理学研究. 7, pp.147-157, 2006-03-31. 九州大学大学院人間環境学研究院
バージョン：
権利関係：

Kyushu University Psychological Research
2006, Vol.7, 147-157

大学生における性に対するネガティブな態度に関する研究[1)]

―自己・他者への意識との関係から―

浜田　恵[2)]　九州大学大学院人間環境学府
北山　修　九州大学大学院人間環境学研究院

Research on negative sexual attitude of college students
―The relation to the consciousness to self and others―

Megumi Hamada (*Graduate school of human-environment studies, Kyushu university*)
Osamu Kitayama (*Faculty of human-environment studies, Kyushu university*)

The purpose of this study was to make negative sexual attitude inventory and to investigate the relation between the attitude and the consciousness to self & others. This research was administered to 138 male and 191 female college students. The result, firstly showed that the negative sexual attitude inventory consisting of 28 items had four factors, which were hate-denial, fear-shame, consciousness of sexual drive, and sense of parent-existence. Four factors were thought that these were similar to college student's peculiarity. Secondly, these all four factors related expressing oneself to others actively. Thirdly, consciousness of sexual drive was related with the consciousness to self & others. Finally, fear-shame and sense of parent-existence related with self-acceptance, worrying how others estimate oneself, and expressing oneself to others actively.

Keywords: sexual negative attitude, college students, the consciousness to self and others

問　題

性的な発達は，青年期において，生物学的変化だけでなく，社会的および情緒的世界における成長や成熟も伴う(J. Coleman・Leo B. Hendry, 2003)。しかしながら，性に関しては，わが国では，思春期にあたる中高生の意識調査や，性に関する症状や問題を抱えた人々についての臨床的アプローチが主であり，一般的な発達における性に対する心理的態度はあまり研究されていない。したがって本研究では大学生を対象に性に対する態度を明らかにしたい。

なお，本研究で「性」とは，針間(2000)が身体的性別・心理的性別・社会的性役割・性指向・性嗜好・性的反応・生殖と分類したうちの「性的反応」を指し，具体的には「身体的な反応として性的興奮を得られる行動（性交渉，自慰行為，キス，ペッティング，ポルノ雑誌やアダルトサイト等見ること，ヌード等想像することなど)」とする。

性的反応は，Masters & Johnson(1966)やKaplan(1974)によって4段階（欲望・興奮・オルガスム・解消）に分けられるとされ，各段階の障害を起因とする勃起障害やオルガスム障害などの性機能不全は徐々に相談件数が増え，大きな問題となりつつある。性的な問題は，ほとんど常に複雑な対人的あるいは内面的葛藤と絡み合っているので，あらゆる医学的介入例において，心理社会的要因を考慮することが依然として必要である(G.C. Davison・J. H. Neale, 1998)。また小此木(1993)は純粋な行動療法だけでなく，性に対して心理的に抱えている不安や恐れを取り除くためには，精神分析的な理解が役立つと述べている。したがって性的な問題へのアプローチのためには，性について人々が抱くネガティブなイメージや価値観を知る必要があると考えられる。

ここで，性に関する先行研究を見てみると，Eysenck(1970)は，性に対する態度について，98項目の質問を大学生に行い，性的興奮，性的憂うつなど15因子を抽出し尺度を作成した。日本においては，清水(1979)がEysenck(1970)の質問項目から日本の実情に合わないもの（ピルの使用など）を省いてEysenckの日本用短縮版ともいえる性に対する態度の尺度（20項目）を作成した。また，和田・西田(1991)は，性的寛容さ・性の道具性・性的責任性の3因子からなる性に対する尺度を作成した。以上のような先行研究から次のような問題点を指摘する

---

1) 本論文は2004年度九州大学教育学部に提出した卒業論文の一部を再分析し，加筆・修正したものである。
2) 本論文作成にあたり，有益なご示唆を頂きました九州大学高橋靖恵先生に心よりお礼申し上げます。また，本研究に快く協力してくださった学生の皆様に深謝します。

ことができる。

まず性に対する態度の尺度は作成されてから25～35年が経っているため，現在の日本の実情に合っているとは言いがたい（例えばピルは私たちの生活で徐々に認知され始めてきている）。また，「性」を広く捉え，「性」の中に含まれる要素を概観するに留まっているので「性」とそれを取り巻く心理的な問題を追求することは難しいと考えられる。また性行為など実際の性経験に関する研究では回答の信憑性の問題がある（J.Coleman・L. Hendry, 2003）ため，本研究では性に対する態度を問うこととする。また性的反応を扱うために，性交渉だけでなく自慰行為や同性愛・ポルノ雑誌等の影響も考慮する。

性に対するネガティブな態度の3側面　ところで小此木（1993）は，自己喪失の恐怖（自分が衝動のままに流され相手の思うままになって自分を失ってしまうのみ込まれる不安）や快楽に我を忘れることが後になって屈辱感，喪失感，自己毀損感などとして体験される場合に，性機能についての障害として現れることがあるとしている。つまり，自己の内的なネガティブな態度が性の障害と結びつくことがあると言えよう。また，性に関する問題が主に親密な人間関係の中で顕在化する（C.G.Davison・J. H.Nale, 1998）ことから，親密な他者との関係におけるネガティブな態度を想定することができよう。さらに，若者の性は，家族や近隣社会のタイプなどからも影響を受ける（J.Coleman・Leo B.Hendry, 2003）という観点から，周囲や親，友人に対する態度も考える必要があるだろう。「性」は個人的に語られにくい反面，性犯罪などの情報はマスコミによってセンセーショナルに取り扱われる。その閉鎖性と過大な情報によって，広く外界と比べて自分はどのように違うかという点で不安などのネガティブな態度をもつのではないだろうか。以上のことから，本研究では性に対する（a）内的な態度，（b）親密な他者との関係における態度，（c）より広い外界への態度の3つの側面に着目したい。

性に対するネガティブな態度と自己肯定感・他者への意識　臨床的知見から大川（1998）は，女性の側面から性と心身医学の関連について，「性欲は本能のひとつではあろうが，それははじめから認識されたり性行動に単純に結びつくわけではない。性を好ましいとする気持ちや，相手と関わりたい気持ち，またそれを含めた自己肯定的な自我が育つことと，それを行動化する学習が必要である」と述べている。つまり，性を好ましくないと思う気持ちが他者とのコミュニケーション不全を生むと考えられる。また，健常群を対象にした調査において，対象が兵庫県の高校2年生のみと限定されてはいるが，性は汚いと思う人ほど，生活の価値観において「退屈感」「虚無感」「徒労感」を強く感じることが示されている（兵庫県・家庭問題研究所，2003）。このことから，性に関する病理を持たない人々においても，「性」を否定的に捉えることと生活における充実感など自己肯定感の低さは関連があると考えられる。

「自己・他者への意識」　平石（1990a）は，健康－不健康，対他者－対自己という2つの両極性を軸として考慮しながら，①青年期心性と②心理学的健康性という2つの観点から自己意識の特徴とその全体的な構造を明らかにした。さらに平石（1990b）はそこから抽出された12の成分から以下の因子を抽出し自己肯定意識尺度を作成した。

（i）自己受容：自分の個性を尊重し，葛藤もなく受け入れ，信頼していること。
（ii）自己実現的態度：自分の取り組むべき課題を知り（役割・目標の発見），それを達成しようと取り組んでいる（達成への指向性と連続性）。そして生きがい感や意欲を感じている（動機づけ）こと。
（iii）充実感：精神的・身体的に日々の生活に満足している状態[3]。
（iv）自己表明・対人的積極性：他者の中で自分を生かされ，自己の存在の安定（自己確立感）が他者の関係の安定と結びついていること。
（v）被評価意識・対人緊張：過剰なまなざし意識と，それによる対人場面での緊張感。
（vi）自己閉鎖性・人間不信：他者不信のために，他者の中で自己を安定させることができない状態。

（i）～（iii）は対自己領域と表され自己に対する肯定感，（iv）～（vi）は対他者領域と表され対人関係において見られる態度を表している。そのため，本研究では「性」と「自己・他者への意識」との関係をこの尺度を用いて検討する。

性　差　性に対する態度は，生物学的要素すなわち性差によって性への接近頻度が変わることが想定できる（落合ら，2002）。また性教育協会（2001）の調査では，中学生の初めてのデートで男子は「自分が誘った」，女子は「相手が誘った」が多く，高校・大学生の初めての性交ではその差はさらに強まるなど，若い男女の性体験率が並ぶような現代においても男子が誘い，女子は受身という古典的な性役割が早い時期から根付いているのである（大川，2002）。したがって本研究では，性差も検討の対象とする。

目　的

本研究の目的は，大学生を対象にして性に対するネガティブな態度を測定するために，「性に対するネガティ

[3] 充実感については先行研究で厳密に言及されていないため，筆者が項目内容から判断し，記述した。

ブな態度」尺度を作成することである。その際，個人の内的な態度・親密な対人関係における態度・より広い外界への態度の３つの側面に着目する。また性に対するネガティブな態度と自己の肯定感・他者への意識の関連を検討する。性に対するネガティブな態度と自己の肯定感・他者への意識の関連においては，「性をネガティブに捉える人の方がそうでない人よりも自己肯定感が低い」「性をネガティブに捉える人の方がそうでない人よりも他者を否定的に見る」という点に着目する。

第１研究

目　的

性に対するネガティブな態度尺度を作成し，その性差を検討することを目的とする。

Table 1
性に対するネガティブな態度尺度の因子分析結果（重みづけのない最小二乗法，プロマックス回転）

	N1	N2	N3	N4	共通性
第１因子：嫌悪・否定（α＝.87）					
33 性に関する行為からはできるだけ避けて暮らしたい。	.88	−.05	−.25	−.07	.85
17 性に関する行為には嫌悪を感じる。	.79	−.02	−.07	.04	.63
6 性に関する行為については，良いイメージがない。	.77	.03	−.11	−.03	.61
32 性に関する行為をすることに，罪悪感がある。	.72	.01	.08	.13	.54
12 自分がまったく性的な感情を抱かなければよいのに，と思う。	.66	−.12	.14	−.02	.47
18 自分が誰かと性的な関係を持つことは，とても考えられない。	.64	.02	.00	−.10	.42
5 セックスなど，２人で行う性に関する行為はこわい。	.59	.25	−.10	−.10	.43
4 性的興奮や性的絶頂感のために自分を見失うことはみっともないと思う。	.56	−.14	.16	−.08	.36
24 性に関する行為は，社会に認められるべきではない。	.52	−.13	.01	.07	.29
21 性について考えると良心がいたむ。	.51	.03	.29	.22	.39
36 性に関する行為には，むなしさを感じる。	.47	−.02	.37	−.08	.37
第２因子：不安・恥ずかしさ（α＝.86）					
29 性に関する行為について，自分がほかの人とどの程度違うのか不安になる。	−.26	.87	.07	.03	.84
28 自分がする性に関する行為のことを，パートナーがどのように感じるか心配だ。	−.28	.85	.07	.01	.80
30 パートナーと，性交渉（セックス）をうまくできるかどうか不安だ。	.00	.76	.16	−.20	.64
27 性に関する興味や知識を行動に移すのは恥ずかしい。	.12	.67	−.17	.04	.49
25 性に関する行為について，知識が少なくて不安である。	.09	.62	−.09	.02	.40
35 性に関する行為について，自分が考えることと周りの人が考えることは違うのではないかと心配だ。	−.02	.59	.09	.13	.37
26 性に関する興味は，周囲に知られたら恥ずかしいものである。	.11	.51	−.10	.10	.30
15 セックスなど，２人で行う性に関する行為について，パートナーに意見を言うことは遠慮してしまうだろう。	.11	.50	.07	−.22	.32
1 性について話すことは恥ずかしい。	.26	.40	−.15	.06	.25
第３因子：性的衝動への意識性（α＝.69）					
20 性的な衝動によって不安を感じることがある。	.26	.18	.66	−.04	.53
3 恋人ではない人と性的関係を持ちたいと思うことがある。	−.17	−.12	.58	−.15	.40
19 性に関して，こんなことを考えてはいけない，と思うような空想を抱くことがある。	.20	.05	.53	.10	.33
23 世間一般ではタブー視されているような性的行動をしてみたいと思うことがある。	−.26	.04	.52	−.01	.34
34 自分の性欲に恥ずかしくなることがある。	.19	.24	.48	.15	.34
38 私は性に関する行為をしなくても十分幸せに暮らしていけるだろう。(*)	.37	.08	−.45	.00	.34
第４因子：親の存在感（α＝.76）					
22 性に関する行為について，興味を持ったり考えたりすることは親を悲しませるだろう。	−.06	−.06	.02	.91	.84
10 私の親は，私が性的なことに興味を持ったり性に関する行為をしたりすることに厳しいと思う。	−.05	−.04	−.08	.73	.54

(*) は逆転項目。

方　法

質問紙の作成　予備調査として行った，大学生および大学院生24名の自由記述から得られた回答や，先行研究(Eysenck，1970；和田・西田，1998)から性に対するネガティブな態度を示していると思われる記述を選び出し，質問項目を作成した。最終的な項目作成には臨床心理学を専攻する大学院生2名と筆者で内容的妥当性や表現を検討し，内的な側面に関わるネガティブな態度として16項目，親密な対人的側面に関わるネガティブな態度として11項目，外的な側面に関わるネガティブな態度として11項目の計38項目を作成した。

調査対象・時期　大学生および大学院生329名（男性138名，女性191名，平均年齢20.7歳，S.D＝1.74，回収率48.10%，有効回答率89.16%）を分析対象とした。調査時期は2004年12月上旬であった。

手続き　質問紙は全て封筒に入れて大学の講義時間などを使って配布・回収した。性に関する内容は非常にプライベートなものであるため，個人のプライバシーに配慮し，家に持って帰って回答してもらい，封をした状態で翌週回収した。配布時には強制ではないことや個人を特定するためのものではないことを強調した。希望者には郵送による回収も行った。

Table 2
性に対するネガティブな態度尺度因子間相関

	N1	N2	N3	N4
N1 嫌悪・否定因子				
N2 不安・恥ずかしさ因子	.50**			
N3 性的衝動への意識性因子	−.04	.18**		
N4 親の存在感因子	.37**	.30**	.07	

**；p<.01

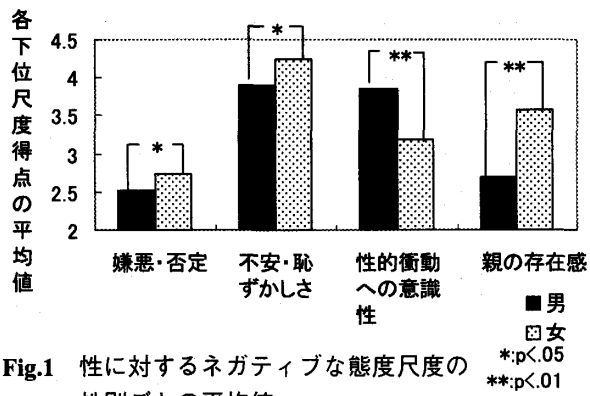

Fig.1　性に対するネガティブな態度尺度の性別ごとの平均値

結　果

性に対するネガティブな態度尺度の因子分析　性に対するネガティブな態度尺度すべての項目について，天井効果・床効果は見られなかった。そこで，38項目を対象に重みづけのない最小二乗法プロマックス回転による因子分析を行った。固有値の減衰状況（第1因子から順に8.29, 3.33, 2.08, 1.47, 1.16）と解釈可能性により，因子数は4が妥当と判断した。ただし，各項目のうち，共通性が.16に満たなかった4項目，因子負荷量が.40に満たなかった5項目，複数の項目に.40以上の負荷を示した1項目を除き，再度因子分析し，因子の命名を行った(Table 1)。

第1因子は「性に関する行為からはできるだけ避けて暮らしたい」「性に関する行為には嫌悪を感じる」など11項目から成り，「嫌悪・否定」因子と命名した。第2因子は「性に関する行為について自分がほかの人とどの程度違うのか不安になる」「性に関する興味や知識を行動に移すのは恥ずかしい」など9項目から成り，「不安・恥ずかしさ」因子と命名した。第3因子は「性的な衝動によって不安を感じることがある」「恋人ではない人と性的関係を持ちたいと思うことがある」など6項目から成り，「性的衝動への意識性」因子と命名した。第4因子は「性に関する行為について興味を持ったり考えたりすることは親を悲しませるだろう」「私の親は，私が性的なことに興味を持ったり性に関する行為をしたりすることに厳しいと思う」の2項目から成り，「親の存在感」因子とした。各因子間の相関はTable 2に示した。

信頼性の検討　尺度の信頼性を検討するため，Cronbachのα係数を調べたところ，第1因子は.87，第2因子は.86，第3因子は.69，第4因子は.76であった。第3因子がやや低めではあるが，十分な信頼性を得られた。

性差の検討　各因子ごとの平均点の性差をt検定により比較したところ，全ての因子で有意差が検出された。第1, 2, 4因子においては女性が有意に高く(第1因子：$t(327)=2.37$, $p<.05$；第2因子：$t(327)=3.18$, $p<.01$；第4因子：$t(327)=6.19$, $p<.001$)，第3因子においては男性が有意に高かった($t(327)=6.04$, $p<.001$)。結果をFig.1に示す。

考　察

第1研究の目的は性に対するネガティブな態度尺度を作成することと，その性差を検討することであった。

1．性に対するネガティブな態度尺度について

（1）嫌悪・否定因子　この因子は，「性」を積極的に回避し，嫌悪感を示す因子である。その項目からは，「自分が誰かと性的な関係を持つことは，とても考えられない」など，自分が性的存在であることを否定していることがうかがえる。溝上(1999)は身体的・性的成熟を

始めとした，青年期における様々な変化過程で，それまで作り上げてきた自己が新たな自己を認められずに葛藤を起こし，それが自己の否定性につながると述べている。日本性教育協会(2001)によると，最もポピュラーな性体験である性交と自慰について，性交経験率は男子が20歳，女子が21歳で半数をこえ，22歳では男子は約80%，女子は約70%が経験していた。また自慰については男子は22歳ではほぼ100%，女子は30%程度であった。本研究の被験者のほとんどが20歳前後であったことを考えると，被験者たちは性経験をする過程にある者が多かったと考えられる。本研究においては，こうした性的経験の過渡期において，変わりゆく自己を否定する防衛として性を嫌悪・否定したのではないかと考えられる。

（2）不安・恥ずかしさ因子　この因子は，性について自分を他者と比べたり言葉にしたりすることに何らかの不安や心配があることを表している。また，「パートナーと，性交渉（セックス）をうまくできるかどうか不安だ」など，性的な機会に直面した際には不安や心配があるが，一方で大学生が性の存在や自分が性的存在であることを認めていることもうかがえるといった消極的・両価的な否定的態度を示していると考えられる。

また，第1因子と第2因子は比較的強い相関が見られた。両因子とも性に関する行為そのものへのネガティブな態度を表しているためと考えられる。しかしこの2因子の差異として，第1因子は性の存在自体を積極的に回避する態度を表すことに対し，第2因子は性の存在は認めることはできるが，それを言葉にしたり，他者と比べたりする行為に不安や心配を感じることが違いとして挙げられよう。

（3）性的衝動への意識性因子　本因子は，性的な衝動を叶えたいという意識と性的な衝動に従うことを禁じる意識とが併存していることが特徴である。性的な衝動を抱くことは自然なことではあるが，社会的動物として生きていくためにはその衝動をコントロールすることが必要である。本因子はそうした意識が強く示されていると考えられる。

（4）親の存在感因子　この因子は，性に関して親の存在を意識してネガティブな態度が表されている因子である。4因子の中で唯一明確に他者，しかも親という最も近しい他者を意識している。臨床的見地からは性欲障害など性的な問題に親からの否定的なメッセージなどが関連していることが言われている(大川，1998)が，この結果はそれを示唆するものと言えよう。親は子どもにとって初めての他者であり，かつ自己を形成するのに多大な影響を与えるため，本因子におけるネガティブな態度は様々な面に影響を及ぼすと考えられる。

2．性　差

否定・嫌悪，不安・恥ずかしさ，親の存在感因子の平均点は女性が有意に高かった。これは，女性が性を生物学的に意識することがあまりなく，比較的性への親和性が低い(日本性教育協会，2001)ことや女性が一般的に性に対して抑圧的に育てられる(大川，1998)という特徴に合致すると考えられる。抑圧的であるために，否定的なイメージに陥りやすいのだろう。さらに，NHKの性意識調査(2002)によると，女性，特に40代以降の女性ではセックスの意味を「義務」「不快・苦痛」とする者が際立って多い。年代が異なるので一概には言えないが，今回の大学生女性における平均点の高さは，セックスを苦痛に感じる女性達の心理的な一側面を表していると考えられる。また，第3因子は男性が有意に高かった。男性は一般的に性的衝動が高い(大川，1998)と言われ，それを表すことが女性と比較して自由であると考えられる。その分衝動をコントロールすることが社会適応における重要な課題であるとも言え，必然的に意識が高くなる側面もあるのだろう。

第2研究

目　的

第1研究で得られた性に対するネガティブな態度尺度と自己・他者への意識の関連を検討することを目的とする。

方　法

調査対象・時期　第1研究と同じ。

手続き　質問紙による測定。質問紙の内容は，(i)第1研究で作成した性に対するネガティブな態度尺度，(ii)自己肯定意識尺度(平石，1990b)であった。

結　果

尺度の検討　先行研究に倣い，対自己領域・対他者領域に分けてそれぞれ因子分析(重みづけのない最小二乗法，プロマックス回転)を行ったところ，因子負荷量が.35に満たなかった1項目，複数の項目に.35以上の負荷量を示した2項目を除き先行研究通りの因子となった。対自己領域の第1因子を「充実感」，第2因子を「自己実現的態度」，第3因子を「自己受容」，対他者領域の第1因子を「自己閉鎖性・人間不信」，第2因子を「被評価意識・対人緊張」，第3因子を「自己表明・対人的積極性」と命名した(Table 3-1，3-2)。

性に対するネガティブな態度と自己肯定意識尺度の関連　性に対するネガティブな態度尺度の各4因子についてそれぞれ平均点を算出し，その得点について上位から30%，40%，30%の割合でわけ，順にHigh群，Middle群，Low群とした（以下，H, M，L群と略記)。また，

Table 3-1
自己肯定意識尺度（対自己領域）の因子分析結果（重みづけのない最小二乗法・プロマックス回転）

	S1	S2	S3	共通性
第1因子：充実感（α＝.88）				
17 精神的に楽な気分である。	.90	−.23	−.07	.87
6 生活がすごく楽しいと感じる。	.77	.09	−.14	.62
8 わだかまりがなく，スカッとしている。	.75	−.26	.06	.64
35 充実感を感じる。	.62	.34	−.04	.50
23 満足感がもてない。(*)	−.60	−.08	.01	.37
40 自分はのびのびと生きていると感じる。	.50	.09	.25	.33
26 自分は好きなことがやれていると思える。	.44	.21	.10	.25
27 前向きの姿勢で物事に取り組んでいる。	.37	.35	.16	.28
第2因子：自己実現的態度（α＝.84）				
3 自分には目標というものがない。(*)	.22	−.95	.03	.94
13 自分の夢をかなえようと意欲に燃えている	−.10	.88	−.02	.78
20 本当に自分のやりたいことが何なのかわからない。(*)	.10	−.70	−.08	.51
28 情熱をもって何かに取り組んでいる。	.20	.69	−.11	.52
24 自分の良い面を一生懸命伸ばそうとしている。	.07	.43	.18	.22
第3因子：自己受容（α＝.68）				
22 自分の個性を素直に受け入れている。	−.07	−.10	.97	.95
41 自分の良いところも悪いところもありのままに認めることができる。	.12	.07	.56	.33
1 自分なりの個性を大切にしている。	−.06	.09	.44	.20

(*) は逆転項目

自己肯定意識尺度の6つの因子について，それぞれ平均点を算出し，因子得点とした。性別と性に対するネガティブな態度尺度各4因子の各群を独立変数，自己肯定意識尺度6因子の因子得点を従属変数とした2×3の2要因分散分析を行った。群の主効果・単純主効果が有意であった場合の多重比較は，Tukey の HSD 検定を行った。結果を以下に示す(Table 4-1～4-2)。なお，ここでは性に対するネガティブな態度尺度の下位因子1～4をそれぞれ N1～N4，自己肯定意識尺度6因子の対自己領域の第1因子～第3因子を S1～S3，対他者領域の第1因子～第3因子を O1～O3と表記する。

1．嫌悪・否定因子(Table 4-1)

（1）対自己領域：各因子とも N1との有意差は見られなかった。

（2）対他者領域：O3において N1の主効果のみが有意であった（$F(2,323)=8.82$, $p<.001$)。多重比較を行ったところ，L－M, L－H 間に有意差が見られた($MSe=0.59$, $p<.05$)。

2．不安・恥ずかしさ因子(Table 4-2)

（1）対自己領域：S3について N2の主効果に有意差が見られた($F(2,323)=6.23$, $p<.01$)。多重比較を行ったところ，L-H 間で有意差が見られた($MSe=0.57$, $p<.05$)。

（2）対他者領域：O2($F(2,323)=23.52$, $p<.001$)と O3($F=(2,323)$, $p<.001$)について N2の主効果に有意差が見られた。多重比較を行ったところ，それぞれ L-M, M-H, L-H 間で有意差が見られた($MSe=0.581$, $p<.05$; $MSe=0.558$, $p<.01$)。

3．性的衝動への意識性因子(Table 4-3)

（1）対自己領域：S1において性別の主効果，N3の主効果，交互作用が有意であった($F(1,323)=6.09$, $p<.05$; $F(2,323)=6.17$, $p<.01$; $F(2,323)=4.40$, $p<.05$)。N3の主効果について多重比較を行ったところ，L-H 間に有意傾向が見られた($MSe=0.60$, $p<.10$)。交互作用について下位検定を行ったところ，男性において N3の単純主効果が見られた($F(1,323)=0.604$, $p<.01$)。多重比較を行ったところ，L-M, L-H 間に有意差が見られた($MSe=0.604$, $p<.01$)。

S2においては交互作用のみが有意であった($F(2,323)=3.89$, $p<.05$)。下位検定を行ったところ，男性において N3の単純主効果が見られた($F(2,323)=4.21$, $p<.05$)。多重比較を行ったところ，L-M, L-H 間に有意

Table3-2
自己肯定意識尺度（対他者領域）の因子分析結果（重みづけのない最小二乗法・プロマックス回転）

	O1	O2	O3	共通性
第1因子：自己閉鎖性・人間不信（α＝.84）				
21 私は人を信用していない。	.74	.01	.15	.56
18 他人との間に壁をつくっている。	.68	.02	−.17	.49
10 人間関係をわずらわしいと感じる。	.66	.06	.09	.44
16 他人に対して好意的になれない。	.59	−.15	−.03	.37
2 自分はひとりぼっちだと感じる。	.58	.12	.01	.35
12 友達と一緒にいてもどこかさびしく悲しい。	.53	.31	.04	.38
25 友人と話していても全然通じないので絶望している。	.49	.11	−.02	.25
4 自分は他人に対してこころを閉ざしているような気がする。	.47	.09	−.26	.30
第2因子：被評価意識・対人緊張（α＝.83）				
29 人から何か言われないか，変な目で見られないかと気にしている。	−.21	.81	−.07	.70
19 人に対して，自分のイメージを悪くしないかと恐れている。	.01	.79	.08	.63
34 人に気をつかいすぎてつかれる。	.12	.60	.07	.37
14 自分が他人の目にどう映るかを意識すると身動きできなくなる。	.11	.59	.01	.36
31 無理して人に合わせようとしてきゅうくつな思いをしている。	.11	.58	−.17	.37
30 自分は他人よりおとっているかすぐれているかを気にしている。	.14	.56	.04	.33
11 他人に自分の良いイメージだけを印象づけようとしている。	−.01	.48	−.03	.23
第3因子：自己表明・対人的積極性（α＝.82）				
7 人前でもこだわりなく自由に感じたままを言うことができる。	.31	−.15	.80	.75
39 疑問だと感じたらそれらを堂々と言える。	.19	−.14	.74	.61
36 相手に気を配りながらも自分の言いたいことを言うことができる。	−.13	−.02	.61	.39
9 人前でもありのままの自分を出せる。	−.10	−.12	.60	.38
32 自分のなっとくのいくまで相手と話し合うようにしている。	−.17	.14	.58	.38
33 自主的に友人に話しかけていく。	−.20	.22	.54	.38
15 友だちと真剣に話し合う。	−.36	.24	.42	.36

差が見られた（MSe＝0.85, p<.05）。

S3においてはN3の主効果のみが有意であった（F(2,323)＝5.47, p<.01）。多重比較を行ったところ，L-H間に有意差が見られた（MSe＝0.57, p<.05）。

（2）対他者領域：O1においては，N3の主効果のみが有意であった（F(2,323)＝15.73, p<.001）。多重比較を行ったところ，L-H, M-H間に有意差が見られた（MSe＝0.55, p<.01）。

O2においては，性別（F(2,323)＝11.53, p<.01），N3（F(2,323)＝20.46, p<.001）の主効果が有意であった。N3の主効果について，多重比較を行ったところ，L-M, L-H, M-H間に有意差が見られた（MSe＝0.581, p<.05）。

O3においては，N3の主効果が有意であった（F(2,323)＝3.63, p<.05）ため，多重比較としてTukeyのHSD検定を行ったところ，L-H間に有意差が見られた（MSe＝0.60, p<.05）。また交互作用について下位検定を行ったところ，男性においてN3の単純主効果が有意であった（F(2,323)＝4.87, p<.01）。多重比較を行ったところ，L-H間に有意差が見られた（MSe＝0.60, p<.01）。

4．親の存在感因子（Table 4-4）

（1）対自己領域：S3において，N4の主効果が有意であった（F(2,323)＝3.48, p<.05）。多重比較を行ったところ，L-H間に有意差が見られた（MSe＝0.58, p<.05）。

（2）対他者領域：O2とO3それぞれにおいてN4の主効果が有意であった（F(2,323)＝4.80, p<.01; F(2,323)＝5.83, p<.01）。多重比較を行ったところ，どちらもL-H間に有意差が見られた（MSe＝0.63, p<.01; MSe＝0.59, p<.01）。

考　察

第2研究では，第1研究で作成した性に対するネガティブな態度尺度各4因子と，自己の肯定感・他者への意識

Table 4-1
嫌悪・否定因子 H－M－L 群における自己肯定意識尺度の平均値および F 値

		平均値(SD)			F 値			群の多重比較
		H 群(SD)	M 群(SD)	L 群(SD)	性別の主効果	群の主効果	交互作用	(5%水準)
充実感	男	3.35 (0.62)	3.30 (0.86)	3.28 (0.87)	1.07	0.17	0.48	
	女	3.16 (0.74)	3.18 (0.78)	3.31 (0.84)				
自己実現的態度	男	3.44 (0.99)	3.24 (1.02)	3.47 (0.97)	0.14	0.85	0.73	
	女	3.32 (0.89)	3.43 (0.88)	3.52 (0.90)				
自己受容	男	3.90 (0.71)	3.81 (0.74)	3.95 (0.80)	0.42	2.41	3.89	
	女	3.67 (0.81)	3.92 (0.76)	3.97 (0.74)				
自己閉鎖性・人間不信	男	2.73 (0.72)	2.71 (0.79)	2.57 (0.91)	1.47	0.71	0.44	
	女	2.65 (0.68)	2.50 (0.72)	2.55 (0.83)				
被評価意識・対人緊張	男	3.28 (0.82)	3.23 (0.69)	2.96 (0.88)	1.11	2.23	1.11	
	女	3.38 (0.77)	3.16 (0.79)	3.22 (0.87)				
自己表明・対人的積極性	男	2.91 (0.69)	3.05 (0.71)	3.36 (0.85)	0.66	8.19***	0.02	H<L M<L
	女	2.99 (0.75)	3.14 (0.79)	3.41 (0.78)				

Table 4-2
不安・恥ずかしさ因子 H－M－L 群における自己肯定意識尺度の平均値および F 値

		平均値(SD)			F 値			群の多重比較
		H 群(SD)	M 群(SD)	L 群(SD)	性別の主効果	群の主効果	交互作用	(5%水準)
充実感	男	3.29 (0.87)	3.17 (0.72)	3.47 (0.82)	1.19	1.68	2.43.	
	女	3.03 (0.84)	3.33 (0.63)	3.27 (0.90)				
自己実現的態度	男	3.39 (0.99)	3.29 (1.01)	3.46 (0.99)	0.12	0.33	0.92	
	女	3.29 (0.98)	3.51 (0.81)	3.45 (0.87)				
自己受容	男	3.78 (0.74)	3.80 (0.73)	4.04 (0.76)	0.00	6.23**	1.10	H<L
	女	3.60 (0.86)	3.91 (0.67)	4.11 (0.74)				
自己閉鎖性・人間不信	男	2.64 (0.78)	2.79 (0.80)	2.55 (0.85)	1.46	1.24	1.47	
	女	2.70 (0.72)	2.50 (0.72)	2.47 (0.79)				
被評価意識・対人緊張	男	3.60 (0.70)	3.20 (0.71)	2.80 (0.81)	0.75	23.52***	0.39	H<L M<L H<M
	女	3.62 (0.70)	3.14 (0.78)	2.91 (0.78)				
自己表明・対人的積極性	男	2.84 (0.72)	3.02 (0.71)	3.41 (0.79)	1.58	16.00***	0.25	H<L M<L H<M
	女	2.87 (0.69)	3.20 (0.76)	3.53 (0.80)				

についての関連を検討した。

性に対するネガティブな態度の4因子は全て自己表明・対人的積極性に関連のあることが示された。すなわち，ネガティブな態度の高い人は，自己表明・対人的積極性が低いという結果であった。自己表明・対人的積極性は他者の中で自分を生かしていく(平石，1993b)という社会への適応能力であり，また他者に対して自分を表現し満足を得ることができるための能力でもあると考えられる。性に対してネガティブな態度が高い人は，性的なことに嫌悪感を抱いたり，周囲にどう思われるかを気にしたりすることから，性に関すること，さらにはそれ以外のことについても満足に表現できないのではないかということが示唆された。

また，不安・恥ずかしさ因子と親の存在感因子は，自己受容，被評価意識・対人緊張，自己表明・対人的積極性と関連することが示され，両因子におけるネガティブな態度と自己・他者への意識との関連の類似性が示唆された。両因子は自分が性的存在であることが他者（親）にどう思われるかを気にするという態度がうかがえる。平石(1990)は青年期における自己意識の構造について，「自己の存在の安定が他者関係の安定と結びついている」と述べている。社会の中で“適切な役割を演じること”

Table 4-3
性的衝動への意識性因子 H－M－L 群における自己肯定意識尺度の平均値および F 値

		平均値(SD)			F 値			群の多重比較
		H 群(SD)	M 群(SD)	L 群(SD)	性別の主効果	群の主効果	交互作用	(5%水準)
充実感	男	3.12 (0.80)	3.29 (0.79)	3.89 (0.54)	6.09*	6.17*	4.40*	
	女	3.15 (0.87)	3.22 (0.80)	3.23 (0.73)				
自己実現的態度	男	3.26 (1.05)	3.29 (0.92)	3.90 (0.84)	0.42	2.41	3.90*	
	女	3.37 (1.06)	3.51 (0.83)	3.36 (0.84)				
自己受容	男	3.65 (0.76)	4.02 (0.68)	4.26 (0.64)	2.32	5.47**	2.05	H<L
	女	3.76 (0.73)	3.83 (0.82)	3.92 (0.77)				
自己閉鎖性・人間不信	男	2.92 (0.77)	2.60 (0.85)	2.09 (0.50)	0.71	15.73***	1.62	L<H M<H
	女	2.88 (0.82)	2.55 (0.61)	2.41 (0.77)				
被評価意識・対人緊張	男	3.42 (0.74)	3.11 (0.70)	2.45 (0.81)	11.53**	20.46***	0.39	L<H M<H L<M
	女	3.62 (0.73)	3.24 (0.78)	3.06 (0.81)				
自己表明・対人的積極性	男	2.94 (0.83)	3.18 (0.66)	3.52 (0.71)	0.28	3.63*	2.39	H<L
	女	3.16 (0.90)	3.10 (0.76)	3.22 (0.76)				

Table 4-4
親の存在感因子 H－M－L 群における自己肯定意識尺度の平均値および F 値

		平均値(SD)			F 値			群の多重比較
		H 群(SD)	M 群(SD)	L 群(SD)	性別の主効果	群の主効果	交互作用	(5%水準)
充実感	男	3.16 (0.65)	3.29 (0.84)	3.41 (0.81)	0.63	0.60	0.49	
	女	3.17 (0.76)	3.26 (0.80)	3.19 (0.81)				
自己実現的態度	男	3.57 (0.91)	3.27 (0.98)	3.44 (1.04)	0.00	0.46	0.97	
	女	3.37 (0.93)	3.45 (0.83)	3.47 (0.93)				
自己受容	男	3.65 (0.76)	3.85 (0.73)	4.05 (0.75)	0.16	3.48*	0.15	
	女	3.77 (0.85)	3.87 (0.74)	4.03 (0.67)				
自己閉鎖性・人間不信	男	2.81 (0.71)	2.70 (0.76)	2.56 (0.94)	2.72	2.09	0.04	
	女	2.68 (0.68)	2.50 (0.81)	2.41 (0.68)				
被評価意識・対人緊張	男	3.46 (0.77)	3.20 (0.80)	2.92 (0.77)	0.03	4.80**	0.48	L<H
	女	3.35 (0.78)	3.21 (0.79)	3.07 (0.88)				
自己表明・対人的積極性	男	2.90 (0.59)	3.07 (0.75)	3.31 (0.87)	2.01	5.83**	0.02	H<L
	女	3.01 (0.82)	3.20 (0.74)	3.46 (0.71)				

*:p<.05　**:p<.01　***:p<.001

と“自分自身であること”に葛藤を抱え始める青年期(J. Coleman・Leo B. Hendry, 2003)においては，自己の存在の安定のためには，他者からどう見られているかを考慮することは不可欠であろう。したがって，性に対して他者との関連で自分の性がどうあるのかを気にする人々は，自己の存在が不安定であると考えられる。そのことが他者関係の安定や，他者に対して閉鎖的になること，他者からの評価を気にすること，対人緊張を抱くことと関連するのだろう。また，自己受容に関しては，性的衝動への意識性が低い人の方が高い人よりも自己受容が高いことが示された。自己受容とは自己のどのような側面も受け入れることだが，性的衝動への意識性を高く持つ群においてはそのような自己を受容することに難しさがあることがうかがえた。それはやはりわれわれの生活が自己の性的な側面をコントロールすることが求められたり，性的であることがタブーとされたりしている(大川，2002)からだろう。性は個人的なものであり，多様性を受け入れることが重視されている(針間，2000)が，性は秘められたものであり，処女信仰など偏った信念が広く残っていることも事実である。それらに左右されず自らの性を認めることは自己を受容することと関連するのだろう。

また，性的衝動への意識性因子は，自己・他者への意

識の全てと関連することが示された。これは，青年期の特徴のひとつとして，生じてくる性的欲求への対処を大きな問題である(斎藤，2002)ことと一致すると考えられる。対他者領域での関連がすべてに見られたことから，性的衝動への意識性因子に含まれる項目は，人を直接巻き込んだりパートナーに影響を与えたりするものではなく，あくまで自分ひとりの性のあり方に対するものであるにも関わらず，対人関係に対する意識に否定的になることが示唆された。

性　差　性的衝動への意識性因子と充実感，自己実現的態度との関連においてのみ，性差が見られた。男性において性的衝動への意識性が低い者の方が高い者よりも充実感と自己実現的態度が有意に高かった。この男性にのみ見られる傾向は，男性は女性よりも性的衝動のコントロールが社会生活において重要な役割を占めると言われていること(大川，1998)に一致すると考えられる。男性においては性的衝動，いわば動物としての本能をうまくコントロールできることと，社会的な営みを図る人間としての自分自身に満足を得ることや，性という本能とは別次元の“夢”や“目標”に向かっていくこととは関連があるのではないかということが示唆された。

総合考察

本研究では，大学生を対象に性に対するネガティブな態度を測定するための尺度作成を行い，性に対するネガティブな態度と自己・他者への意識との関連を検討した。結果，性に対するネガティブな態度尺度としては嫌悪・否定因子，不安・恥ずかしさ因子，性的衝動への意識性因子，親の存在感因子の4因子が抽出された。この結果は，先行研究から考えられる，性に対するネガティブな態度の3つの側面とは異なるものであった。これは3つの側面がカップルでの性機能障害を訴える人々の特徴をもとに考えられたためであると考えられる。すなわち，問題を訴える人々はセックスができない（それゆえに子どもができない）という悩みから病院やカウンセラーを訪れる。阿部(1998)，大川(1998)らによって報告されているセックスができない原因は，皆カップルの患者から得られた臨床的経験によるものであった。つまり，患者たちが抱える性に対するネガティブな態度は，必ずパートナーを含むものであると言える。

一方，本研究では大学生・大学院生を対象に調査を行った。大学生・大学院生は，固定したパートナーが必ずいるとは限らない。そこが先行研究と異なる点であったと言える。だが，清水(1979)が示すように，実際の性経験がない人でも性に対して何らかの意識は持つと考えられる。したがって本研究で得られた結果は，カップル固有の態度に限らず，性そのものに焦点を当てた大学生の性に対するネガティブな態度に注目したものといえる。

まず，嫌悪・否定因子と不安・恥ずかしさ因子は藤井(1998)が指摘する，大学生活の病理の背後には常にあるという不安と未熟さに一致した傾向を表していると考えられる。不安・恥ずかしさ因子は，その平均点の高さからも，大学生が性に関しても何らかの不安を強く持つという特徴が示唆された。また同じく指摘されている未熟さは嫌悪・否定に関連しているのではないかと考えられる。すなわち，自分が経験していないという未熟さを嫌悪感や否定によって隠そうとするのかもしれない。とすれば，嫌悪・否定は経験によって変化する可能性がある。だが一方で嫌悪・否定因子に含まれる項目には，性嫌悪症に見られるような性に対する嫌悪感情もうかがえる。したがって，本因子に見られる感情は，性に関する病理の前段階としても存在しうるものかどうか，臨床群と健常群の質的比較などによって検討が望まれる。

また本研究では，性に対するネガティブな態度として親に関する因子が抽出された。これは親からの分離が課題のひとつでもある青年期たる大学生の特徴のひとつと見ることができるだろう。Treboux・Busch-Rossnagel(1995)は15～19歳の女性において，性的態度への影響は年齢が高くなるほど，両親から友人が強くなることを見出したが，今回の結果より，性に対するネガティブな態度には，親の態度についても考慮する必要があることが示唆された。性的な問題に関しては親からの否定的なメッセージを受けていることが要因のひとつとして指摘されており(大川，1998)，親から性に関してどのような態度を捉えるかは，青年自身の性のあり方や，対人関係をいかにとるかということについて問題となるのかもしれない。

最後に性的衝動への意識が高い人ほど，自己の肯定感は低く，他者に対しては否定的であったことから，従来指摘されている，性的欲求の高まりにどう対処するかが青年期の課題のひとつであること(斎藤,2002)が改めて確認されたと言えるだろう。

性に対するネガティブな態度と自己・他者への意識との関連を検討した結果，特に自己表明・対人的積極性と被評価意識・対人緊張因子との間で関連が見られた。よって，対人場面での緊張を抱くことや他者の中で自分を生かしていくことと，性に対してネガティブな態度を抱くことは関連のあることが示唆された。我々の対人関係は，親子関係や友人関係など非性的な関係から始まる。そこでの関係のとりにくさを始めとして性的な関係を結びにくいという問題は言われているところである(阿部，1998)。だが，逆に性的なものに否定的なイメージがあるために，恋人など親密な対人関係を取れないものもいる(針間，2004)。今回の，性に対するネガティブな態度尺度と対人的積極性と関連の結果は，そうした人々に，性

に対するネガティブな態度尺度の4因子として抽出された各項目に含まれる態度が関わっているのではないかということが示唆された。

今後は妥当性・信頼性も含め，項目の追加・修正によって，性に対するネガティブな態度をより詳細に捉えることができるような質問項目を行っていくことが課題である。また，性に関する問題は青年期に限らず，成人期以降も続いていく(金子，2004; 村口，2004; 荒木，2004)。したがって今後は縦断的研究や面接調査などにより，質的側面を捉えていく必要があるだろう。

引用文献

阿部輝夫（1998）　増え続けるセックスレス・カップル　看護，**50**, 151-159.

阿部輝夫（1998）　性と心身医学―男性の側面から―　心身医学，**38**, 247-257.

藤井義久（1998）　大学生活不安尺度の作成および信頼性・妥当性の検討　心理学研究，**68**, 441-448.

G.C.Davison & J.H.Neale（2003）　*Case Study in Abnormal Psychology*. 6th ed : John Wiley & Sons　(G.C.デビソン・J.H.ニール　村瀬孝雄（監訳）（1998）性機能不全　異常心理学，誠信書房)

針間克巳（2000）　セクシュアリティの概念　公衆衛生，**64**, 148-153.

針間克巳（2004）　二十代から三十代における性の相談　現代のエスプリ，**438**, 33-40.

Hans J. Eysenck（1970）　Personality and Attitudes to Sex : *A Factorial Study Personality*, **1**, 355-376.

平石賢二（1990a）　青年期における自己意識の構造―自己確立感と自己拡散感から見た心理学的健康―　教育心理学研究，**38**, 90-99.

平石賢二（1990b）　青年期における自己意識の発達に関する研究（Ⅰ）　―自己肯定性次元と自己安定性次元の検討―　名古屋大学教育学部紀要（教育心理学科），**37**, 217-234.

J. Coleman, & Leo B. Hendry.（2003）　*The Nature of Adolescence*. : Talor & Francis Group（Jコールマン&レオB．ヘンドリー　白井利明他(訳)（2003）　青年期の本質　ミネルヴァ書房）

溝上慎一（1999）　自己の基礎理論―実証的心理学のパラダイム―　金子書房

小此木啓吾（1993）　性愛のジレンマ―性機能障害の臨床から　imago, **11**, 28-35.

大川玲子（1998）　性と心身医学―女性の側面から―　心身医学，**38**, 293-299.

大川玲子（1998）　女性のためのセクシュアリティ　ペリネイタルケア，**17**, 30-34.

大川玲子（2002）　性の健康生態　公衆衛生，**66**, 734-153.

落合良行・伊藤裕子・斎藤誠一著　（2002）　青年期の心理学　有斐閣

清水弘司（1979）　大学生における性の発達と依存対象について　心理学研究，**50**, 265-272.

Treboux, D & Busch-Rossnagel, N（1995）　Age differences in parent and peer influences on female sexual behavior : *Journal of Research on Adolescence*, **5**, 469-488.

和田実・西田智男（1991）　性に対する態度および性行動の規定因（Ⅰ）　―性態度尺度の作成―　東京学芸大学紀要Ⅰ部門，**42**, 197-211.

和田　実（1998）　大学生が性交する際に重視する要因―性差と性交経験種別からの検討―　東京学芸大学紀要Ⅰ部門，**50**, 111-119.

W. H. Masters & V. E. Johnson（1966）　*Human Sexual Response : Boston : Little, Brown*.（W. H. マスターズ・V. E. ジョンソン　謝国権・Robert 竜岡(訳)（1966）　人間の性反応　池田書店）

日本性教育協会（1998）「若者の性」白書　小学館

兵庫県・家庭問題研究所編（2003）　青少年の性意識と性行動に関する調査報告書